

# 真 生

第 三 卷 一 月 號

## 人格の宗教

- 世に宗教といふ宗教は多い。然乍真にこれ宗教なりとして私共の採るべき宗教がいくつあることであらうか。
- 宗教は誤つた救いをのみ説いて、私共の罪惡に對する良心をマヒせしむるを以つて能事終れりとするものではない。又單なる喜びと望みと樂しみとを以つてのみ眞の宗教とするものでもない。
- そこには我も人も共に眞實に生きんとする所の人格の教へが常になければならぬのである。人格の世界これこそ私共の眞に願ふべく眞に到るべき人類世界の理想である。
- 而して人格の世界とは何であるか。それは只眞に生きるより外には何もものもない。謂かゆれば一切が如來を中心として心より恵み恵まれるの生活である。
- 如來に救はれ。神に生きると云ふことも此の生命に生きることである。往生といふも成佛といふも要するに此の生活の完成である。
- 友よ。我等はこの心もて一切を許し一切を愛して眞に如來の大道に生やうではないか。人格の宗教、人格の生活は我等の最も心より求めて止まないところのものである。(念)

々 人 る め 孕

目次

△人格の宗教	念阿彌
△孕める人々	尅子
△公私一如の生活	土屋觀道
△懺悔録(十九)	演阿彌
△震災雜感	撫象干
△難脈、報告	

「新年をお芽出度いと祝ふのも。芽出度もなしと悟るのもそれは此方の手前勝手と云ふものだ。芽出度い芽出度くないに係らず新年は來てゐる。

「佛のお慈悲を有難いと悦ぶのも。一向喜ばせんと悲しむのも。それは手前勝手といふものだ。喜ぶ悦ばぬに係らず如來の誓願に變りはない。

「佛の前には思へぬ。救はれぬ。救はれぬ。而し仕うも救はれて居る様には思へぬ。救はれぬ。救はれぬ。地獄墮ちの者どより仕うしても信せられぬ。かゝる者の爲めに。罪人なりとも疑ふ可からず罪根深きをも嫌はじと呼ひかけて居られる。疑へる儘が救ひ取られてゆく。柿澁が甘味になる様靈化の不思議といふものか。

「かど云ふて悪人正機。悪人を無條件で救濟するのが佛の職掌私に罪を造るのが常である凡夫ちやものと放逸無漸で居れるか。それは法の偉大さを信じて機を省る事の無い者である。先徳はかゝる者を天魔なり。外道なり。往生極樂の仇敵だと罵る居られる。

「此信機に破れず信法に傲らず。厭世に陥らず樂天に失せず。足元ばかりを氣にせず。有頂天にもならず。二邊の中道を渡らすのが念佛である。

「此中道は理屈攻めの中道でない。救ひたい佛の心が救はれる衆生の心に滲み透る。救ふ佛の心に皆がなつたとき即ち佛凡一體の念佛が生れるのだ。總てが佛化せられ淨佛國土成就衆生となつたのである。禪も祈りも念佛も皆な此中核を顯正する事業に外ならぬ。そこが宗教の終局であり。神の御國である。(尅)

◇女には兒を孕んだと云ふ事より嬉しい事はない、又是れより苦しい事もない。サウいふですわ、妾はもう五月にもなるんですから。厭やな内にも蔽ひ切れの悦びを見せてゐた。

◇私も一人の佛を孕んでゐる、が仲々産れ落ちて呉れぬ、本當に佛を産み落とす事は難中の難だ、いや私ばかりでない皆の人が皆佛を一人づつ孕んでゐる、けれど本當に三月五月八月と數へられる人があります。

◇大地も腹一杯、春といふモノを孕んでゐます。大正十三年も生成の氣を満々と孕んでゐる、乃至は二本の草、石ころ一つに至るまで皆佛を一人づつ孕んでゐる、が其孕んでゐる子が腹の中でムツムツと動く程も感じてゐる者が何れ丈あるか。

◇宗教といふと偉い六つかしい事の様に思ふが、此如來を内に宿し其如來の動くが儘に進退止する事に外ならぬ、恰度蟬の殻が脱ぎ捨てられぬ前は皮として内なる蟬と偕なつて居る様に、如來を俺が孕んで居るのでなくして應ては俺が如來そのモノとして動く事だ、猶進んで醜き過去の俺を脱ぎ捨て、如來の蟬が高踏雄飛する事だ。

◇多くの人は此寒空に腹に一物も無く震へて居るのではあるまいか、口に御芽出度うと云ひ乍ら温い酒の味二つ知覚ぬ者ではあるまいか、先づ芽出度さは腹に一子を孕む事である、既に孕める事を知らして貰ふ事が求道である、仕うか我れに一子を與へさせ給へと宇宙の大ミオヤに願ふのが念佛である、その時如來は既にお前に一子が下して有つたのだと教へて下さる、此一言を聞いてハツと驚き、我腹に手を當てて見る時我れに一子があつた、大如來のはからひの中に我等は養はれて居たのである、如來の世界の中に如來のみ手の儘に導かれ、如來の教への儘に知らさして貰て行くのだ。

◇皆さんあなた方の腹の中には佛が宿てゐますか、もう幾月ですか、お互にお正月を機として腹にさすりを當てて見ませう、南無阿彌陀佛 (尅子)

## 公私一如の生活

## 土屋觀道

人は少しでも能くなりたいたいものである。然にそのよくなることが自他共に一致すればよいが、少しでも自他の間に其の利を一にしない事があると。私共は其の何れに依るべきか、世間の多くは自分の利を捨て、他人の利を計る事を以つて道德であるかのやうに思つてゐる、乍然之が果して私共の正しい人間の道であらうか。

私共のやり方は天地の大道を如實に知り得ない限り一切の行爲が必しも自然の大道に叶い自他共存の理想生活に叶つてゐるかは計り知ることのできないものである、乍然一切の行爲に對し其の善惡の規程を設けずして何等の考へもなく唯やりほうだいにやりちらすといふことは必ずや兩者の間に計り知ることのできない不利を來すであらう、之は主として私共が幼少の時から、環境のまゝに生長して各自利己主義的傾向に教養せられて來た結果であるが、從て實際自分には公利的のつもりでやつた事でありながらさへともすれば利己的のみなり易い傾向が多い、されば何等の反省もなく己が欲するまゝにやらかして周圍の利害をかまはないならば社會は自づから利己主義の世界にのみなり終るであらう、否現に今日の社會に於ては已に我慾のはり合ひとなり、弱肉強食、生存競争の世となつて眞の幸福は見ること出来ぬ有様である、尤も夫も見やうによつてはかゝる事柄もやがては自己の眞利にあらず反つて眞實の幸福でないといふことを各自に自覺するの時が來るのであつて、自ら社會の進歩は道德的社會生活の

必要を感ずるに至り各自に道德を實行するに至るものであるとも見られないこともない。乍然此のまゝである道德の世界が自然にこの世に表れて來るものであると思ふ事は大いなる早計であつて決して一朝一夕にして現はれて來るものではない、從つて此間随分と誤られた社會生活の悲喜劇が此の世にも演ぜられて來るのである、彼の封建的壓制主義の制裁が恰も一つの道德かの如き形と感じを以つて社會に行はれてゐるが如き、強者が弱者に對する壓制的要求が度々くり返されて來る時はいつしか夫れが正しき共存の道德なるかの如く、さうしていつしか下より見ても上に對する當然の義務かの如き感を以つて迎へらるゝことがある、乍然——かゝる制度は社會進歩の未だ幼稚な時代には止むなき制度であつたとしても、夫れは今日の道德ではもとよりなくいはゆる強者の強要に過ぎぬものであつてかゝる有様は到底弱者の浮むせはないのである。中には單なる強者の壓迫ではなくて、暫く對者の無智と幼少なものとの爲めに、來るべき開發を目的として之に制裁を加へた時代もあつたであらう、例へば親が子の爲めに加ふる或る種の教育的制裁の如きは夫れである、乍然かゝる場合はその本心の出發點に於て已に前とは全々異つた意味に立つてゐるものである。尙ほこの外、初めには社會生活に必要であつた道德が今はその環境の變遷につれて其の必要がなくなつたものもあり、或は反つて夫れの爲めに社會生活の向上をさへ妨ぐるものが今尙残つてゐるものもある、而もかゝる道德が私共の自覺のない時代には往々活きた道徳として社會生活の上に用いられることもあり、中にはかゝる道德の弊害を自から知つて之を捨てんとして前者と争ふことも全々なしとはいへぬのである、從つて現今の如き社會生活の一大變遷に際しては之に對する社會道德の規程も自ら二つに分かれて進取派と保守派との分烈ともなるのであるが中には同

じ一人の考であり乍ら或る點は己に變り、或る點は未だ變るべくして變らない人も多いであらう、乍然かゝる時にも私共はやはり自分によくなり度いといふことだけは終始一貫の事實である、而て此の間斯る社會生活の中に於て、よくなる方法の一として其の社會生活と各人各位の個人生活との間に何等の衝突もなくして生活して行ける道德、若は生活の事實はないか、之が私共の今日求むる處の社會道德であり、又人類生活の根本中心である。

尤も道德といふからには自分も許し他も亦許す處の普遍的人類生活の根本規範でなくてはならぬ、即ち人類生活の普遍的規程でなくてはならない、而てそれが又各人各位をして全から、共鳴し全から行はずにはあられない本心の要求である、いはゞ一切人類の生活をして最高理想の自由と正義と博愛の大道に進ましむる處のものである。

然に實際の社會は果してかゝる意味に於て完成せられてゐるのであらうか、又果してかゝる世界が此の世に存生すべきであるか、夫れは一の理想であつて、一切はそれに向つて進むべきものである、而も此の事實の傾向は遂に私共をして、公私一如の信仰にまで徹底せしむべく私共を導いたものである、尤もこの一如の信仰が先きに來てから一如の事實が現はれて來たものか、それとも一如の事實が經驗せられてから初めて一如の信仰がこの世に現はれて來たものか、それは暫く別として、とにかくそれが吾人の信念となり自覺となつて人類生活の中心思想と現はれて來たことは人類思想の一大展開であるといはねばならぬ。

然らば公私一如の生活とは一體どういふことを意味してゐるか、それは自他一體の生活ともいひかへることのできるものである、自他と公私とはもとより一にするものではないが、公といふ中にはもとより自分も其の中の一人として含まれ自他といふ時には、自分は自分以外の者に對してゐるのである、乍然今まで公人としての自分と私人としての自分とは全く別なものゝやうに扱つて來た社會道德に於ては私人としての事と公人としての事とは全々とり離して別な者ゝやうに扱つて來たけれども本來私共各自に於て公としての私と私人としての私と二つの私があり得べきものではない、私といふものは他に對しての私であり、他といふものは私に對しての他そのものに違ひないけれども自他一體の私として私を見ても來る時、公私一如の私がないものではないのである、而て此の公私一如の私こそ自に對しても他に對しても眞に一如の生活であり一體不二の生活である、社會も國家も他人も自己も共俱に共通一如の眞理があつて、そこには一が同時に一切となり一切が同時に一となるの道理がある。

然に世間の多くは普通最大多數の世間の幸福を以つて道德の表准となし、又今回の社會に於て多くは多數の云ふ處を以つて事の眞理を定めやうとする傾きがある、乍然議會の多數必ずしも社會全般の多數でないと同じく、社會全般の主張必ずしも社會そのものゝ眞の平和でないこともある、否眞人一人の叫びが反て萬人將來の眞の叫びでありうる如く、今日の私共は其の時其の場合に於て其の何れの道をとるべきかは、大に考ふべきことである。相互に於て自他の利害が一致すると見る時は其の眞實に於ての利害は暫く別とするも自他共に異議を見ることは少いであらう、乍然自他利害を異にし公私相反するとさへ考へられる時のあるが如き、私共はその時、その場合その何れをさるべきであるか、多數必ずしも眞理でないことが明かになつた限り、私共はもはや之を以て多數決に決することは出來ない、又私を捨て

公をとり、自を棄て、他を立つるといふことが必ずしも眞なりとは云ひ難い今日、私共がさうだと信じて行はない限り決してそれが私共を満足せしめ得るものではない、而も自分の考へた所のものが必ずしも先方の考へ一致するものとも限らず、反つて相反することさへあり、時には先方の考へが反つて正統であることさへ發見することがあるとすれば公私一如の考へも其の實際に至つては決して易々たるものではない、乍然多數決必ずしも眞ならず、盲從雷同もとより不可なれば自己の自覺に待つより眞の方法はない、けれども自分の主張必ずしも絶對的眞理でないこともあり、従つて自己の完全ならざる限り自己一分の主張のみを貫き通さんは決して千古の眞理ではない、殊に兩者に見解を異にし立場を異にする時に於て各自の主張は反て争をして大ならしむる者である、従つて兩者の主張は反つて相反の論議となり、主張となつて、更らに大なる混亂となり、自他の利害得失は永く兩者の平和を破り、社會動亂の因を爲すに至るものである、中には平和の爲めの争いだ、正義のための戦いだと云ふ人々もあるけれども之にはよく考へなければならぬ眞理がある。さればとて正義を争ふことなくして一切無抵抗であつてか、此の點も大に考へて見るべきである。

こゝに於て一切平和の信念がその争いの中にもなくてはならぬ。そこには慈愛が大切である、公私一如の全一的至愛が大切である、如何なる時、如何なる場合にも自他一體公私一如の信念が平和と正義と自由との規範となつて一切が行はれて來ねばならぬ、而て一切の慈愛はこの一如の自覺にのみ初めて現はれて來るのである。

乍然かゝる一如の生活がどうして私共の生活の上に現はれて來るのであるか今日の私共の生活は公私一如といふことをどこまで知見し得てゐるであらう、先方よりの公私一如とし自他一體としての自分と與へらるゝ其行爲は自分に都合よいために賛成もするが、之に反して自分の信とし主張として實際の上に實行し來る時、果してそれがどれだけ實現しねられるかそこには大なる強き信念を要するものである。乍然公私一如の生活は實に宇宙の實相である。而て此の道は一切を包含せる宇宙の大道より之を達観し來らねば此の眞相は現はれて來るものでないのである。自分のことが直に他人のことを含み、他人の事が直に自分の事をも含まれてゐるといふことは公私一如の本質であつて、人類理想の極致である。いはば公私の區劃を全く絶して一如の中に一切を見るのであつて、自他の中にも自他を離れずして常に一體の心から之に當るの生活である。従て如何なる場合にも常に自他一體公私一如の信念からこの一如一體に通ずる人生の大道を見るのである。而してこの信念の伸から導かれ來る自然の生活となる。さうなると人と人の戦も止み、よし兩者に争ふことあるもそれは自他を一體としての眞實道への改善を意味することになり、自分と人とのいやしき區劃もなくなる。自分のことが直に自分一個の爲めではなくして社會全般の上になされておき、社會全般の爲めに爲されたことが直に自分の爲めにも爲されてゐることになるのである。従て一切が此の意味に於て自覺し協調し來る時、各自の幸福が直に一切の幸福となり、一般の仕合が直に自分の仕合となつて來るからして、いつも公私一如の慈愛を以つて眞實に生きやうとすることにもなるのである、従ていかなる時にも場合にも眞實の闘争や弱肉弱食の争いもなく一切が自由と正義と平和との中に進展して自他一體の如來中心生活が營れて來るのである。従て其の初めに申したやうな正義の争いも單なる自己その者の正義の争いでなくて先方をも自分としての中に入つた一

つの改善運動に外ならぬことになる。こゝに於て自分自身にやることも直にそれが一切の人の心であり一切の人の心が直に自分自身の心となるのである。如來の心といひ神の心といふのは此の心に外ならぬ此の心が即ち神の心佛の心であり、而て之が又人の心の根本である。

然に翻て今日の社會を顧るに、國は國との争いであり、人は人との争いである、之を働資問題に見、小作地主の争いに見るも一として此の争闘を語らないものとはない。乍然かゝる人類の争いは決して私共の眞に喜ぶべきものではない、而も私共は今少しく眞實の自由と正義と平和との喜びの世界を此の土に來たすべく努力せなければならぬ時ではないか、而て之を出現せしむるの方法は主として公私一如の生活に待つより外にはないのである。

然らば公私一如の生活は決して自分一人の爲めの利益となることばかりでなく、又他人ばかりの爲めになるといふやうなものでもなく、自他共に一如としての眞實の利益を受くる人生至幸只一の第一義であるといはねばならぬ。而て之を一家の上より見るも、社會國家の上より見るも公私一如の生活は一切人類生活の最高理想の生活である。然に世人は往々にして此の理を知らず、多くは自の爲めに他を排し他の爲めに自を捨てねばならぬかの如く考へてゐる人々がある。乍然宇宙全一の理想より之を眺め、公私一如の佛教の理想より之を見るときは之等は何れも其の眞實の大道を未だ知らない小人の見解といはねばならぬ。而て此の理想こそは天地一體、萬法一如の佛教の眞理、即ち宇宙自然の大道の上に現はれて來る所のものであつて、決して私共の勝手なる心よりして作り出したものでなく、人類文化の一大進展として實に如來大悲の宇宙的理想實現の世界である。(二二、二二、二五)。

## 懺悔錄

(其十九)

演阿彌

おう私達の本當の御父様なる如來よ、イエ御父様と云ふよりモットモット親しくモットモット懐かしい私と一なる如來様よ、私達は今ま何の爲に此處に假の相を現じて二つになつて居るのでせうか、一日も早く一つになつて仕舞ねば本當に心底からの満足は有り得ないので、否な否な現に一である物をかく二つの如く誤執して居る愚かさは何麼した事なのでせう、最早や事實上理解せられて居るに拘らず現實に斯の如く離れて感ぜらるゝと云ふ事はつくづく悲まざるを得ないのであります、夫が直に不一即不異の事實だと安價に教へられたとて何になるものでもありません、實際不異なる事を意識するのは既に不異でない心理を反省せずして唯だ夢の如き陶醉に沈溺して居るのではありますまいか、夫は畢竟一種の蠱惑であり更に一步下がれば追憶であつて其處に眞實なる人間的落付を得られないのは誠に當然なのであります。

然しまた一面に此不徹底が痛感せらるればこそ眞實の向上が與へられるのでせう、本心は何處迄もハッキリした物を望んで居るのでした、然し當時に於ける私は唯だ何か知ら物足無さに毎月のように東奔西走したので、一日は一日とより深くより強く焦燥と遺瀨無さが身を苦しめて實際居ても立つても居られなかつたのであります、おう然様です、創造の苦み！。夫は本當の事です、正直に白状しますればいくら御念佛したつて物足りては居りませんでし、何か仕事をした處で中々本心にピツタリそぐはないし、さればと云つて迷想を續けて見ても自己不徹底に對する祈りのみが操返へされる丈で其處に新らしき天地はチットモ展開されません、消極的に念佛の中の禪悅を喜んで見ても活躍本能の満足を裏切る恨みを什麼しませう、深き生の苦悶を唯だ一時的に避難せんとする爲にのみなら又何をか云はんやです、然し九月の宇でした、G市且寺に於ける上人指導の別時會に參じた私は辛うじて左の如き結論を得たのであります、然し夫は止むを得ぬ歎きの結晶のみであり

ましたでせうか、『理想と現實とに調和の平穩を贏ち得る道は唯一つしかない、願くば着實に一步一步脚下を踏み固めつゝ自己の羸劣なる心情を改造しやう、而して夫は唯絶對なる如來に打まかせて淡き法悦の儘に前途の光明を目掛けて蕩地に勇進しやう』。然し乍ら之は單なる自慰的結論でなくして求道修道に於ける萬古不變の覺悟では有りませまいか、少し漸教的な嫌ひはありますが此信佛精進こそは一切の學人の大道だと思つて居ります、けれども實は之では困まるのです、ステツと思切りひつくり返へつて仕舞度いのです、一大飛躍！。夫は何だか何でもない様な氣も致します、夫につけても待たるゝものは勢至堂の御別時で御座います、十月の月に這入つて間もなく然様です六日の事でした、私は何氣なく裏の田端に出て夕陽の影沈んだ灰色の空を眺めるとも無しに見ますと、フックラふくらんだ有度てふ山の上に嘗て見た事もない教主釋迦牟尼世尊が少し日に焼けた赫黄色の御顔に木蘭色の御衣をまとわれ金色の圓光を後に輝かして慈悲の御眼尻尊くも私の方をジツ

晩出發しました私は翌十五日の夜には二條の停車場に辨榮御聖人を御迎へする事が出来たのであります、二三の隨行の方々と共に人混みの改札口を出られた聖人は私の顔を見ると直に『よう御座いましたつね』と仰しやつてニコリなさいました、私は無言の儘心からなる御低頭を致しました停車場を離れて電車に乗らふとする時又再び摺り寄られて『よう御座いましたね』と仰しやつて下さいました、私は『イエゴウも駄目です』と本當の事を申上げるより外に言葉はありません、私は唯だ淋しき心の儘T氏の御宅で出迎人一同に對する簡単な御法話を耳底に殘しつゝ京の夜の大路を華頂の山へと辿るのでした、『御聖人唯だ御獨りの處で御尋ねて見たい、然し聖人は喜んで下さつたのに過ぎない、迷へる地下から救はれて漸く水平線上に出た事は無論私だつて大なる喜びには相違ない、御聖人は唯だ高い所から見て曲りなりにも浮び出た私の姿を御喜び下さつたのであらふ而して他の多くの浮み出づ可き兄弟達の上に思ひやりの御眼を注がれるのであらふ、此故に私の今

と見て居られるではありませんか、丁度腰から上丈しか見られませんまあ本當に有り得ない事です、其内不圖横を御向きになつて南へ少し歩まれた時『辨榮聖人に似て居られるが』とは思ひましたが餘りの有難さにカッパと大地にひれ伏して仕舞ました、然し考へて見なくとも馬鹿な事です、この様な事が現實に有る可き筈がありません、『矢張幻覺だな』と思ひ直されるので恐る恐る顔を擧げて見ますと其處にはのどかなる有度の山の曲線斗りが空の果を區切つて居るのでした、噫。何と云ふ幼稚な心よと思ふ途端ハツと我に歸ると夫は果敢なや明け方の夢でありました、嗚呼さるにても忘れ兼ねた私の向上道！。『逢見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり』噫昔は物を思はざりに遺瀨無きは今の心よ、然し乍ら此の切なる心に比ぶれば昔耻かし、思慮なき鶏の無事も思ひ遺られて一分慰むる處が無いでも有りませんでした、噫々待たるゝ物は勢至堂の御別時、お、待遠しき十月の御別時よ、併し日は終に恵まれましたU上人の母堂とM様MT様MS様と共に十四日の

後の向上に就ては或は緊急の問題でないと思つて居らつしやるかも知れない、然し乍ら私には私の問題が一番緊急であり大切であり心配でなければならぬ、私には一面弱心が擡頭して何となく私の望む理想がいくら藻掻きに藻掻いて見ても此肉體の有る限りは駄目なのではあるまいかとの豫感がせられてならぬ、是れ強ち未來主義的思想からの影響斗りでもない様である、是れ杞憂であらふか、願くば杞憂であつて欲しい、一切を如來様に打まかせた上は如來様の方でいゝ様にして下さる！而して夫は屹度々々私への満足をかへて下さるに相違ない、夫は屹度さうであると思へるモウ疑もなく慮りもなくさうは思へる、併し何時かと云ふ事では困まる、夫では物足りぬ、一切をまかせた以上今直に靦面に納得させて下さらなければ困まる、今に成る、今に今にご生涯を追求し乍らに果てゝ仕舞ふ様ならば本當に大なる虐げであると思ふ、夫が大慈悲の姿だと云つたどて虐げは何處迄も虐げである、猫の馴り虎の弄び是れ皆な一種のサアデズムである、我が唯一なる父の

中に其んな馬鹿な事があり様筈がない、然し今までも現に藻掻いて居る私を何うして下さるのだらふ、いやいくら藻掻いて見てもいくら追求して見ても無駄だ駄目だと云ふ事があり得やうか、少くとも私達人間は如來様の唯だ一人子として此世に出て来たのだから藻掻いたとて藻掻かないとて救ひは既に完成してある筈だ、いや筈であつても無くても此の止むに止まれぬ全心の要求を如何せんやである、況して『慧日世間を照らして生死の雲を消除す』とさへ聞くものを、何故に『一到直入直入彌陀界』の事實が日常の上に展開されて來ぬのだらふ？。凡ての善智識は教へて呉れた唯だ眞直に如來様へ向へばよいと。無論さうだ、右す可きも左すべきもない、道は眞直であり平易であるのだ然し夫が困まる。』色々と思ひ惱みの足を運ばして居る程もなく何か知ら或る大きな威壓を感じる場所に參りました、見上げると有名な山門であります、月は無いが電燈は明るい、おう何と云ふ現下の私を象徴するにふさはしい事柄であらふ。月はないが電燈は明るい、然かも幾間かは明るい

## 震災雜感

撫象子

今度の震災に就ては随分色々の事が考へしめられる。今ま思ひ出す儘に秩序なき事をならべて見やう。先づ第一に大きなヒツクリカヘリが私の上で起つた、夫は既往の経験の凡てが綜合され統一されて出來上がつて居つた『自分』と云ふものが遺憾無く根柢からくつがへされた事である、就中生の執着に就て平生は殆んど無自覺的であつたにも拘らず其の強い強い執着心がハツキリ赤裸々の姿を示して私の空しき理性を奪つて仕舞つた事は理屈は後で何とでもつくけれども私に取つて大なる屈辱の一つである事を否定する譯には行かない、私はかなり大きなショックを受けて一時思索の繩を牽く程の力の無くなつて仕舞つた事は正に私の自尊心に對する致命傷であつた、實際九月半ヶ月は私の本當の心は何處かへ行つて仕舞つていくら如來様に南無しやうとしても本當に南無し得る丈の宗教賞感が起らなかつた、どうしても如來様の

其先は開です、靜かに私自身を反省しますれば私にはまだ完全に人生觀宇宙觀が成立して居りません、夫は耽美的個人的なのです、偽りなく申します、私は實に幾多の社會的羈絆を脱却して靈の奥底深く平靜な甘美な三昧境に人生屈辱の極樂界を認め乍ら而かも日常生活に自我の絶對的自由をばむさぼりたいのです、是れ一種のバラドックスでなくて何でせう、夫は無論偽りなき自我の屈辱に於てのみ眞實の復活があるのですから自我自山のむさぼりでは無い様ではあります其奥底に尙ほ禪悅法悅の喜びに人生日常の生活苦を忘れんとする事の存する限り正しく拙劣なる個人的耽美的の物ではないかと思はれます、茲に私の不完全があり茲に私の病源があるのです、此故に月は見えないのです、たとひ見れても夫は星の影でせう、而して電燈のみは明るいのです、あゝまばゆき迄に明るい電燈よ、而して洋々として果てしなき私の前途よ、私は唯だ苦しきは、ゑみを残して石壇に登り而して私達の寢床として與へられらる雪香殿へと歸へつたのであります。(續)

中に私の祈りが安住し落付く事が出來なかつたのである。是は一體どう云ふ理由からなのであらうか、私は思ふ、平素餘りに私自身を買ひ被ぶつて居はしなかつたかと云ふ事を、私の信仰は何時の間にが概念化して居たのでは無かつたらうか、否な私の如來様に對する宗教感情に變りはない、然し無いつもり丈では無かつたらうか、又た價値の問題だつてさうである、私は平生は人生の價値に就て心を痛めて居た、而して價値に生きる時斗りが生であつて價値に亡びた時死であると思つて居た、随つて精神の記憶と肉體の存續を以て生とのみ解せんとする事は迷妄的所斷から來た迷執であるに過ぎないと思つて居つた、夫は偽りなき私の誇りであつた、然るに私も亦た多くの人々が考へて居ると同じ様に此の肉體の死滅が恐ろしかつた、而して全く價値に生きんとする事の理解から遠ざかり反省から抜け出さうとして我が行爲の是非善惡に拘らず之を批判し之を分解して見る事を好まなかつた、唯だ本能と道義と及び訓練された丈の智能とが働いた丈で本當の價値的黎明の私は

跡方もなく無くなつて仕舞つたのである、更に又た私の自他感に就ても然りである。私は今でも思つて居る、私は單なる私でなく他は又單なる他でもなく、他は私の他であると同時に自は自他綜合の上にも眞實の自があると、然し地震の時はさうでなかつた、他は死んでも私は生きて居たかつた。人の死よりも我が身の死が恐ろしかつた、して見ると震災前の私は一種の似せ物であつたのだらうか。若し似せ物なら正しく自己欺瞞であり自己錯誤である、實際私自身を赤裸々に引きむいて仕舞へば私と云ふ肉團が此世に存続して居つたとして社會の上にも家庭の上にも左程重大な役目を成し遂げ得られまいと思ふ、大に眞實の信仰を叫ぶ可く現に宇宙の一角を興へられ乍ら、自ら第一線に立つてあらゆる忍苦を我が務として喜び得る丈の力に缺けて居ると思ふ、フランシスの様な大きな力は私には興へられて居ない、敢へてフランシスをゑらうと思つては居はしないけれどもあれ程の力は欲しいと思はざるを得ない、又た私は人に對して同情が餘り深くない様に思ふ、他の痛み他

の痛み他の苦みを我が事の如くに感じ得る丈の情緒に缺けて居る、私には他の人の幸運や善事に對して本當に我事の様に喜び得る丈の温さが無い、同情する前に批評せんとする態度を取るのには本當に醜い事だとは知りながら凡てを抱擁せんとする温さが起らない、こんな人間はなまじ生きて居たとて妻や子や世間の人の世話になる丈である、自分が他の人達の爲めになるよりも他の靈を汚がし他の心を傷ける方が多いかも知れない、然らばむしろ死んで仕舞つた方が公益になるかも知れぬ、併し死ぬのは嫌やだ、死に當面すればすぐ狼狽して仕舞ふ、夫は地震最中だつて餘祐は澤出有つた研究的態度も有つた、自己批判の試みもして見た夫は皆んな皆んな愛生に根ざしを待つて居つたのだ、生への執着に基調を持つて居つたのだ、一例を擧げて見ると私はあの天地を震撼させた地震の最中多分第二震の時であつたかと思ふ、無論立つて居られないので庭の上にしやがんで居つたがフ、御腹が空つぽになつて居るのに氣がついた、世に云ふ所の丹田に氣が入つて居ない、そこでウン

と云つて氣張つて見た、這入らない！。ふだんは無意識にも御腹が充實し落付いて居たのに何うした事なのだらう、今度は如來様を呼んで見た、然し如來様は存在しなかつた、否な實には心底から念ずる事が出来なかつたのである、之は三夜を外に寝た其野宿の床の中でも夜露に冷や乍ら試みて見たが失張り駄目であつた、今になつて思ふと實に恐にも付かぬ事を苦にした物だと苦笑せざるを得ない、然し乍らかゝる些事に迄平素のわたしが遺憾なく裏ぎられた事を見のがしてはならぬ、一日の第二震の後である、人々は群をなして高處へ高處へと避難した、餘りのいぶかしさに何事が起つたかと外に様子を聞きに行く人々は口を揃へて海嘯が來ると云ふ、私はまさか來ないだらうと云つた、すると今海岸へ行つて見て來たが水がすつかり引いてゐるから危険だと眞顔で云ふ、私は其人達の眞顔を信じて家に歸り而して子供に地文學の海嘯の處丈調べて呉れと頼んだ、然し子供に夫を調べると夫の精神的餘祐を持つて居ない様に思へたので自ら書籍を取つて調べた、而して先づ大

概は大丈夫であらうが萬一にも用意として本尊と過去張と及び重要書類丈を持ち出す事の出來る様にした、然し高處へ避難する譯にも行かないので唯だ庭に居たのみであつた、而して若し避けられなかつたなら夫迄と思つて待つて居た、一時間程しても何事もなかつたからモウ大丈夫と云ふ事は的確に判つた、然し人々は夜にならぬ前にモウ殆んど全部は町の中に居なかつた、唯だ男の人達は三五々警戒的に殘つた丈であつた、モウ地震は大丈夫らしいと思つて居つた私も人が居なくなると淋しかつた、而して幾分恐怖を増す感がないでも無かつた、私達の周圍の人達はこの様にスツカリ落付がなくなつて居た、あとで他の方面の話を知ると餘りに私達の周圍の戦々恟々とした有様がみじめであつたかと思ふ、或人は平氣で談笑して居つたと云ふ、或人は大丈夫だと思つて落付いて居つたと云ふ、或人は家がつぶれてからも御眞影を出す迄は此椅子を離れまいと云つたと云ふ、然るに私は家の到れるのを恐れた、本堂が倒れても庫裡が潰れても再び建たないであらう事はわか

り切つた事である、夫が恐ろしかつた、潰れ、ば潰れたで何とか處理はつかふが當分の生活に就て雨露をしのぐに何うしやうか途方に暮れざるを得ない、私達の檀家總代は此地方に於ても有數の方であるが金銭の問題と來たらあきれざるを得ない程有名なものである、此故に私は此點が大變憂慮せられた、どうせつづれ行く伽藍佛敎であらう其兎に角に私達の生活が此の殿堂に依つて持續されて行く以上假令矛盾に惱み乍らとは云へ命の綱である、さるにても私の平生は間違つて居つたのだ私は實際私の財産が唯だ其日々々の労働者達よりも貧弱であり一朝の變事に際して小さなバラツクを建つ丈さへの金のないみぢめさを惹きますには居られなかつた、私の平素の生活状態は餘りに間違つて居る、私達の一ケ年の生計は一ケ年の収入では足りない、毎年々々食い込む斗りである、其中から倒潰した家をかたづけ若しくは引起す事は私丈の力の及ぶ所でない、況して再建に付いていづもの様な重い重荷に脊負される事は到底堪え得る處でない、此故に私は地震や火災に對して非常

の恐怖を感せずには居られない、實際地の振ふ眞最中にもこんな事が強く強く私の腦髓を刺戟したのである、隨つて一面にまだ餘裕は有つたのだとも云へる、然し乍ら私は餘りに自分と云ふ物を中心にし過ぎたかと思ふ、自分の生きる事を物質的に計り考へ過ぎたかと思ふ、噫々私は實に愚か者である、けれども私は信ずる、現にかうやつて居る私は實は假現の相に過ぎない事を、而して私が今ま現に假相として此處に存在しつゝある以上或る一つの任務を果たさねばならぬ事を、而して夫は何處迄も私の止むにやまれぬ要求となつて私の上に既に現はれつゝあるではないかを知り過ぎる程知つて居るのであるが故に、假令宇宙から私の無能が證明され而して見離されても私は私の上に私を見限る事が最早や出来なくなつてゐる事を、噫々なんと云ふデレンマにかゝつたのであらう私は今ま死ぬにも死ねない状態に居る、噫々私のなつかしき如來よ、アナタはモット強く強く私の上に現はれねばならぬ、ソレは本當だ、あゝソレは實に本當の事だ。(一一、一〇、二〇)

本來自性清淨涅槃 眞野鶴松

いんねんの歌 よのね

我にあること神さまが。

もる御光に月夜とそ知る

世の中變する時なれば。

向ふにのつてをしゆるの。

有餘涅槃

皆何事もいんねんで。

人の惡口きいたなら。

はるの夜の夢心地しておほろけに

世界のことらず同じこと。

われの心を直すべし。

かすみをへたて月を見しかな

大きくとれば世界なり。

人にけんごんいはれたら。

無餘涅槃

小さくとればわがみなり。

我前々に人のこと。

ちりもなき清き御空に照る月の

わが耳の上からささるなら。

云ふたる因縁見ゆるなり。

世の雨風を知らすかほなる

せんと生のいんねんを。

凡て我身にあることを。

無住所涅槃

さとつたことなら身の上は。

向ふに見せてくれるなり。

世の人に光と熱を惠みつゝ

ぶじにその日をおくれます。

見ゆるもきくも因縁と。

西に入る日の遺耀うるはし

身上にやみもさいなんも。

日々つとめて行くなれば。

大般涅槃

なれば必ず家内中。

消ゆると段々知れてくる。

月は落ち星かけうすれほのく

不足もなくなる金できる。

○よのね氏は一神道の創設者當年

あけゆく空に慈雲たなびく

子供もできれば何もかも。

七十六歳の老人、故辨榮上人と

關東大震災に就て

思いのまゝになるべけれ。

古くよりの知己の友です。『よの

東の間に家も寶も妻も子も

思ふまゝにどなるなれば。

ね』とは世の根といふ意味ださ

亡ひてのこる人そいたまし

がまんかんにづとめろよ。

うです。常に豆のみを喰として、

みもとせの都亡ひぬつかの間に

向ふに見ゆるは我にある。

道の爲めには全く献身の大きです。(念)

◆道友の諸兄へ 土屋觀道  
謹で新正の壽を賀奉る。別に年賀の禮狀は出しませんから御許し下さいよ。願くは今年も倍舊の交愛を以つて更らに眞生の世界に立ち度御祈り申して止みませぬ

三味會御案内

- 大正十三年一月八日ヨリ
- 例年ノ通り一週間修行
- 静岡縣清水湊本魚町實相寺  
(東海道江尻驛ヨリ約十町)
- 土屋觀道上人指導
- 夜ハ信仰座談會トス
- 會費金壹圓外ニ食費等實費
- 可成毛布御持參願ヒタシ
- 熱心にしんみりと修めたいと存じます。願くは兄弟の上に幸あらん事を。至祈至禱

寄贈並誌代拂込芳名

寄贈の部

○金五圓藤本淨本様

誌載の部

- 金參圓波丹淨様○金貳圓五拾
- 錢齋藤賢融様○金貳圓井口庄藏
- 様中野治榮様名古屋崇徳寺様○
- 金壹圓貳拾錢加藤敦純様○金壹
- 圓伊辻源兵衛様細山加津様安中
- 長榮様油賀十劫寺様三山心鏡様
- 川波源四郎様白根澄海様○金六
- 拾錢澁谷三津治様○金參圓寺井
- 鐵太郎様○金貳圓大石孝三様中
- 野吉太郎様金子達源様○金壹圓
- 西田稱惠様高田志満子様小松原
- 淺七様忍定久様

一五八二〇

◆讀者諸兄に告ぐ

先達ての東京震災の爲め當時八月九月に渡り誌料拂込の方にして今尙誌上に受領廣告なき方は何卒差出郵便局右御一報を願います。

○大正十二年十二月號休刊

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
振替口座東京四七二八番 眞生社  
東京市芝公園第十四號地九番  
編輯兼 土屋觀道  
發行人 眞生  
東京市芝公園第十四號地九番  
發行所 眞生社  
東京市芝區三田四國町二番地三號  
印刷所 三井清次  
東京市芝區三田四國町二番地三號  
印刷所 立々堂印刷所